鎌倉浄土教における親鸞思想の形成と展開

西村慶哉

はじめに

本研究は、鎌倉浄土教の展開において親鸞思想がいかに形成され、どのような特徴を有するのかを明らかにすることに主眼を置くものである。

真宗学において、親鸞独自の思想を検討する際に主流となってきたのは、「伝統と己証」すなわち、「浄土三部経」や七高僧からの相承関係より親鸞の独自思想がいかに形成されたかを窺うという視座である。一方、鎌倉浄土教研究という視座から親鸞研究を見渡すと、その多くは法然門下全般を比較研究した上で、親鸞個人に結論を導いていくという、個人研究的手法が多く採られてきた。

これらの先行研究によって、親鸞思想の独自性について多くが明らかにされていった。しかし、親鸞が同時代の西方願生者や他の法然門流と、どのような関係性を有し、それらがどのように親鸞思想の形成に影響したかに主眼を置いた研究はほとんど見当たらない。したがって本研究では、親鸞思想の形成を考察するために、他宗の西方願生者の影響や他の法然門流との有機的な関係性を明らかにすることに主眼を置いた。また、法然門流と親鸞との関係性を明らかにするために、親鸞と同時代に同地域で教化活動を行いながらも、その著作の多くが未翻刻のままであった鎮西義良忠の初期教学を解明して論じた。これらの手法を用いたことが本研究の独自性である。これは、良忠の教学を研究する主体となってきた浄土宗学においては行われない性格の研究であるから、真宗学のみならず、浄土教学・仏教学にも広く寄与することのできる研究である。以下、本論の章立てに沿って概要を述べる。

第一章　親鸞教判論の形成と展開

第一章では、親鸞の己証とされる「二双四重判」（一代仏教を「竪超」「竪出」「横超」「横出」に判別する教判論）の形成について、同時代の法然門流との比較を中心に論じた。先行研究では、二双四重判の中でも特に「横出（他力の中の自力の教え）」は、他の法然門流にも類を見ない特徴的な思想であると指摘されている。しかし、証空

をはじめとした同時代の法然門流たちの解釈を検討した結果、「他力高調派」に属される法然門流には二双四重判に近しい思想を見ることができ、先行研究で指摘されるような二双四重中の「横出」の開顕を以て親鸞の独自思想であるとは速断し難いことを指摘した。さらに、この二双四重判の説示は東国門弟に向けてあまり発信されておらず、注目を浴びるのは存覚『嘆徳文』および『六要鈔』の登場以降であることも指摘した。

第二章　親鸞における来迎観の形成と展開

第二章では、後年に「臨終不来迎義」と呼称される親鸞独自の来迎観はいかに形成されたのか、同時代の諸師の来迎理解、特に未翻刻文献である良忠『観経疏聞書』との比較を行いつつ、その淵源について考察した。また、親鸞の来迎観はいかに受容・展開されたかについても親鸞門弟所述の諸文献を検討しつつ考察した。結論として、親鸞独自の来迎観の形成・展開について、

① 先行研究で示されるように、東国門弟の間で惹起した来迎に関する諍論が原因である可能性が高い

② 諍論が起きた理由は鎮西義良忠の影響ではないかという先行研究の見解を『観経疏聞書』によって更に補強できる

③ 親鸞門弟にさまざまな来迎理解が混在しているが、これは親鸞が、地域や人物によって送付する書物や、その表現を変えていたことが要因であると考えられる

という三点を指摘した。

第三章　親鸞における報化二土観の形成と展開

第三章では、まず親鸞の己証とされる「報中垂化」（阿弥陀仏の報土中に更に報土と化土とを分ける）説の形成について、同時代に西方を願生した貞慶との比較を行いつつ新たな視座を提示した。「報中垂化」は『教行信証』「真仏土巻」に説かれており、先行研究によれば七祖の相承関係によって形成された親鸞独自思想の一つである。しかし、親鸞と同じく善導→法然の流れを汲む他の法然門流の仏土観と親鸞の仏土観には説相に相違が見られることから、必ずしも七祖相承関係だけが親鸞の仏土観形成の資助となったとは言いがたい。そこで同時代における他宗の西方願生者まで視野を拡げてみると、例えば貞慶が「安養報化」にて願生する弥陀仏土と、親鸞が化土として簡非する弥陀仏土に対応関係が見られた。すなわち、親鸞仏土観の形成を論じるには同時代における他宗（すなわち聖道門）の西方願生者との対比が必要であるとの視座を提示した。

次に、『教行信証』以降の親鸞著作においても同様の視座は必要であるかを良忠『観経疏聞書』を中心に用いつつ検討した。結果として、建長年間の東国地域では、「安養報化」に代表されるような、「弥陀仏土は報土か化土か」という問題意識は『教行信証』撰述時に比してあまり重要視されていない可能性を指摘した。

おわりに

以上のように、親鸞の独自思想といわれる「教判論」「来迎観」「仏土観」の三点について、同時代的視野からその形成過程を論じた。その上で本論文の独自性を述べると、①同時代の浄土教者からの影響を中心に、その形成過程について考察した点、②今まで用いられてこなかった良忠初期教学の文献を用いる必要性を論じた点、の二点である。

これらの作業を通して、親鸞思想研究および鎌倉浄土教研究において、新たな視座を提示できたといえよう。

なお、付録として未翻刻文献の一つであった良忠『玄義文聞書』の翻刻資料も掲載した。これも本論文の成果の一つといえるであろう。